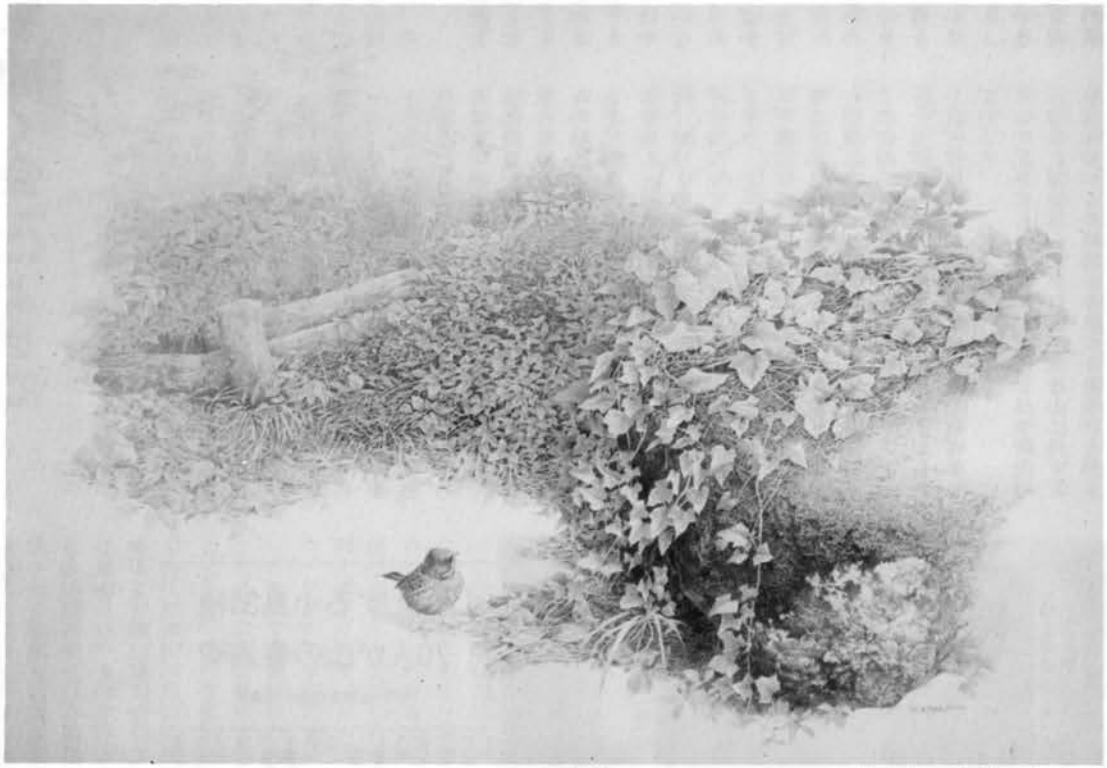
山と博物館

第42巻 第4号 1997年4月25日 大町山岳博物館



アオジ　　絵と文 齋藤 寿

「パレットの中の野鳥たち」展（開催日4/26(土)～5/18(日)）

開催にあたって

私が本格的?に野山を歩くきっかけになったのは四〇年ほど前、東京で暮らすようになったときのこと。故郷の弘前まで自転車で帰ろうと思いつき、足慣らしのつもりで同じアパートの住人と出かけたのが最初です。

散々でした。会社で契約した宿があるからと、よく似た別の山の名前を言われたのがそもそもの始まりで、夜でも一時間ほど登れば着くはずの宿が……ない。

六時間も歩いた末、二〇〇〇メートルの頂上に立っていました。どうも別の山に登ったのだと気付いたときのあの不思議な感動……??

下りは別のコースでかなりの急斜面をガンガン頑張ったのはよかったのですが、残り一時間くらいの地点で足の裏中マメだらけになり、爪先は押されて皮がむけ、前向きに降りることができなくなってしまいました。二人とも後ろ向きでガクガクする膝を抑えながら、半ば朦朧(もうろう)とした体にむち打ってやっと車道に出たのです。バスを待つ間中、顔を見合わせては大笑いしたものです。

その日の夜、私の部屋で二人は次の山行を計画していました。若さか馬鹿さか、無謀さにあきれます。つらかった思い出は時間が経つと懐かしいものです。

以来、夜行日帰りの強行軍を繰り返しました。休みを続けてとれないので、夜中に現地に到着し、微夜で登るのですが、これは倍以上疲れます。と言うのも同じ山を朝、再び登って初めてわかったのです。〝こんなに簡単なのか〟と拍子抜けするくらいでした。

自分の時間に限りがありますので、遠方や高い山には行けず、一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートルくらいの山を主に歩きました。そのうちコース計画もあまり立てず、思い立ったらすぐ出かけるようになりました。このため、地図を調べる必要のない知っている山に何度も何度も足を運ぶようになったのです。　山登りから山歩きに変わり、楽しみが〝登る〟から〝見る〟になりました。今は見るより感じる、おいしくお茶が飲める場所が好きです。

もともと熱心なバードウォッチャーとは言い難く、キノコの季節には下ばかり見ていて一日過ごしてしまうこともたびたびです。特に何を見るとか観察するとかではなく、枯木や倒木に腰を下ろして、音が出るほどボーっとして、魔法瓶のコーヒーなんか飲むのが最高です。ちなみに自転車で弘前へ帰る計画は未だ思いつきのままです。

（イラストレーター）

山岳博物館「小鳥の声を聞く会」によせて

佐野昌男

私が鳥と本格的にかかわりだしたのは、信州大学教育学部の羽田教室へ入ってからなので、今年で四〇年目を迎えようとしています。それまでは家の近くの山野へ行って、わなで捕えては飼育することに明け暮れていました。しかし、生態学としてやっていくためには、野外で姿や鳴き声を聞いて、その種類を正しく判断できなくてはなりません。その勉強の地が戸隠と大町でした。

学生時代、山岳博物館の針ノ木周辺の総合調査と爺ケ岳でのライチョウ調査で何回となく大町を訪れました。前々館長（H2・4・1～H7・3・31）の千葉さんはまだ学生服のよく似合いそうな独身青年、歴代館長（S48・4・6～H2・3・31）の平林さんは新婚ほやほや、私は卵からフ化したばかりのヒヨコみたいなもので鳥のことはもちろん、このおふたりの館長さんからは本当にいろいろ良いことばかり教えていただき、山博には私の青春の全てがあったと言っても過言ではありません。

卒業してからも、時折、調査のお手伝いの依頼をされましたが、信濃教育会でおふたりから主催している山岳講座では毎年ご指導をいただき、山博との関係がずっと続いていました。

一方、山博では毎年探鳥会を実施していましたが、それまで年によりあちこち場所を変えてきたのを昭和四十八年から、博物館の裏山の鷹狩山に場所を固定しました。私はこのときから、この行事のお手伝いを始めました。探鳥会から「小鳥の声を聞く会」と名称を変えたのも、このころだったと思います。現在、この行事は〝友の会〟で運営されていますが、〝友の会〟へ移されたのは昭和五四年からのことです。山岳総合センターをお借りしての一泊二日の研修会で、一日目の午後から鳥を主体とした講義が始まり、夕食後は鳥、昆虫、植物などスライドやビデオ、映画などが行われます。就寝前、大人だけが集まり、さらに自然談義が続けられます。時には清沢由之先生の秘蔵酒〝各種木の実酒〟をいただきながらの懇談となります。参加者は友の会会員が主で、関東方面から毎年この会へ参加することを楽しみにしている常連も多くいます。また、フリー参加者も〝友の会〟の存在を知り、その場ですぐ入会申し込みをする人も大勢います。

平成二年には信毎大町支局長森本丘利（現報道部部長待遇）さんも見えられ、五月八日の朝刊に次のような記事を掲載してもらい、この会のPRとなりました。

一方、この参加者の半数を占める子どもたちは、枕投げに興じ、修学旅行気分を味わっています。

この記事にもあるように、翌日は午前四時三〇分に博物館前に集合し、鷹狩山に通ずる林道をゆっくり時間をかけ、小鳥の声を聞きながら登っていきます。参加者は毎年増加の一途をたどり、六〇名を突破するようになり、私ひとりではとうてい無理となり、平成四年ころからは地元に住んでいて、私の後輩である鳥羽悦男先生にも応援していただくようになりました。そして、大人グループと子どもグループの二班に分けて、実施しています。

さえずる小鳥35種 70人が山の春満喫

大町・山博友の会が探鳥会

大町山岳博物館友の会（荒沢道会長）は六日、大町市の東山ろくで小鳥の声を聞く会を開いた。約七十人が参加、芽吹き始めた林でさえずる小鳥の声を楽しんだ。

参加者は午前四時半、同博物館前に集合。前日から黒山岳総合センターに泊まり込んだ小学生ら五十人が加わった。佐野昌男・長野市塩崎小教諭の案内で北安曇郡八坂村境にある鷹狩山に通じる林道を歩いた。

鳴き声だけで姿の見えない小鳥の種類を聞き分けようと、途中、じっと立ち止まりながら、約二時間かけて散策した。渡って来たばかりで、人間を恐れないオオルリが、こずえに奇麗な姿を見せ、参加者を感激させた。佐野教諭によると、この朝、鳴き声も含めて確認できたのは三十五種で、探鳥のコースとしては最高。コースの終点では友の会が用意した豚汁で朝食。採りたての山菜がその場で、てんぷらにして振る舞われるなど、山の春を満喫していた。

また、清沢由之・穂高中教諭が、道すがら採集した十数種の食べられる山菜を解説して、主婦たちを喜ばせた。

35種もの野鳥の鳴き声が楽しめた大町市の東山山ろく。山菜も豊富で参加者は味も満喫

信濃毎日新聞，1990．5．8より

私は大抵、子どもグループを担当させてもらっています。子どもたちは山頂近くなると、小鳥の声どころではなくなり、私を置いて先を急ぎます。というのは、空腹もさることながら、友の会の人たちが豚汁と山菜天ぷらを作って待っていてくれるからです。

山頂で、おいしい朝ご飯が済むと、道すがら集められた山菜の講習が始まります。帰りは山菜摘みをしながら下りるわけですが、私はこの講習で教えてもらったコシアブラの芽を摘んで帰ります。これが、年によって芽ぶきが異なり、三年に一度くらいしか丁度よい年が巡ってきません。

山頂での楽しみは朝ご飯ともうひとつ、眼前に広がる北アルプスの眺望です。ことに、北から連なる白馬三山、唐松、五竜、鹿島槍、爺、蓮華の後立山連峰とその南の北葛が最高です。

一度だけでしたが、こんなことがありました。

その朝は小雨が降っていましたが決行し、山頂をめざしました。ところが、山頂へ着くなり、今までの雨がサッと上がり、残雪いっぱいの雄大な山並みが姿を現しました。眼下に大町市の街並みと水の張られたばかりの田んぼが広がり、その水面にアルプスの姿が写しだされていました。しかも、そのとき大きな虹がかかったのです。出発するとき、雨が降っていたので、だれもがカメラなど持っていなくて皆で悔しがりました。「こんなチャンスはめったにない。うまくカメラに収めれば大町市の観光課はきっと高く買い取ってくれるだろう。」とそろばんをはじいている人もいたくらいで、それはもう二度とこんなチャンスはないと思われるような素晴らしい景

色が広がりました。

私はこの会が終わると必ず、博物館に出現鳥を報告してきました。それを博物館側で毎年整理して一覧表にしてくれています。かれこれ、この報告を始めて二十四年が過ぎました。その間に出現した種類の合計は、六六種類でした。この数は今後さらに増えていくものと思われますが、五月中旬のほんのひとときに行われるこの会にこれだけの種類が現れたことは、バードウォッチングとしての最適地です。近々、出版される「信州の自然大好き百科」（郷土出版社）にもバードウォッチングの穴場のひとつとして紹介させていただきました。

さて、六六種類の内訳を渡り別に円グラフにまとめたものを次に示します。グラフから明らかなように留鳥が五〇％、渡り鳥が五〇％で、冬鳥の中でも渡りの遅いツグミとカシラダカが観察されています。

日本三名鳥で夏鳥のオオルリは、毎年必ず美しい姿とさえずりを聞くことができます。また、コマドリは渡りの途中、アルプスへ入る前のものか、一度だけ観察できました。留鳥のウグイスも毎年必ず、さえずりが聞かれます。

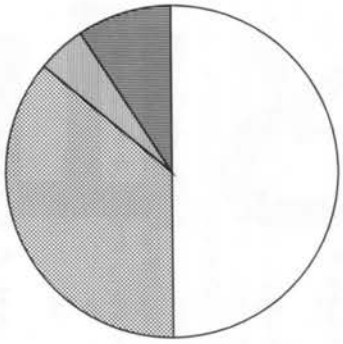
国鳥のキジも大抵、中間地点の畑跡の草原辺りで鳴き声を聞くことができます。

ちなみに、大町市の鳥はライチョウですから（県鳥も）、これは出てきません。しかし、声は毎年聞くことができます。ただし、動物園の禽舎からです。

さて、昭和四十九年以来、昨年までの出現種が六六種でしたが、毎年現れる鳥は先に信毎に紹介されたのが三五種類というように平均が三五・三種でした。

しかし、その内容を見ていくと、昭和の終わりころまではたびたび現れていたカッコウやホトトギス、ジュウイチ、サンコウチョウやトラツグミ、マミジロ、エゾムシクイなどが姿を消してしまいました。これらの鳥は、全て森林の鳥たちです。

畑跡を少し登ったところでは、道が急カーブし、その奥には沢が流れ、林も充実しており、この辺りで前述の鳥たちの姿を見ることができました。私はここを鳥溜（とりだ）まりと呼んでいました。ところが、この斜面がすっかり伐採され、丸坊主になってしまいました。また、山頂にはいろいろな建物ができ、車もどんどん上がるようになった影響により、これらの鳥たちが姿を消したのかもしれません。



渡り別分類	種類数	%
留鳥	33	50.0
渡鳥－夏鳥	23	34.9
冬鳥	2	3.0
漂鳥	8	12.1
合計値	66	

図1．鷹狩山の渡り別出現状況

【シジュウカラ　森林の鳥の代表】

これまで観察されていた鳥が姿を消したのに出現種数はあまり変わりがなく不思議に思われるかもしれませんが、それはその年だけ、偶然出現したと思われる鳥がいるからです。例えば、イスカ、コムクドリ、チョウゲンボウ、フクロウなどです。

これまでは種類数のみで見てきましたが、これだけ広大な森林が伐採され、荒地草原化してきたので、生息個体数を調べてみればおそらくホオジロなどの草原性の鳥が増えていることと思います。

里山はいつも三～四〇年に一回は、伐採される生活林で、これは里山のもつ宿命です。後一〇年もすれば再び森林の鳥が姿を現すものと思われます。

毎年どのくらいの種類が現れるか、その出現率（鷹狩山における全出現種類数66種を一〇〇としたときの割合）を折れ線グラフに表してみました。点線部分の年は雨が降って観察中止の年や未報告の年です。年により、多少の増減がありますが、平均五三・五％を前後しています。最も多かったのが、昭和五十五年四五種（六八・二％）、昭和四十九年四三種（六五・二％）でした。少なかったのが昭和五十六年三〇種（四五・五％）、昭和六十三年と平成四年三一種（四七・〇％）でした。

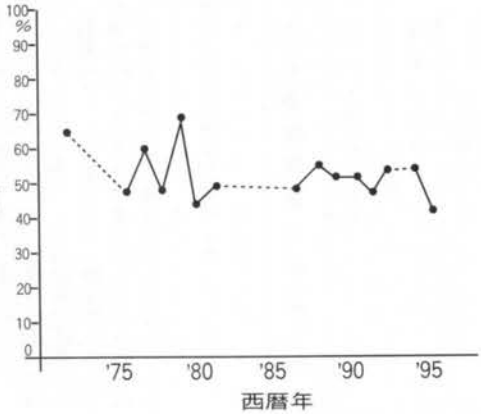


図2．鷹狩山の種類出現率の推移

大町には居谷里湿原、アルプス山麓など素晴らしい探鳥地がたくさんありますが、ここ鷹狩山コースはスタート地点が博物館で、しかも宿泊施設のある山岳総合センターが並んであるという最高の立地条件に恵まれ、これからも末永くこの「小鳥の声を聞く会」が続くよう願って、終わりにしたいと思います。

（長野市立篠ノ井西中学校校長）

喫茶「こまくさ」によせて

―四回目の開店―

桜の蕾もふくらみ、今年も「こまくさ」開店の季節がきました。山岳博物館友の会運営の喫茶「こまくさ」が開店したのが平成四年の七月、それ以降は十一月に閉店し、つぎの年の四月に開店というパターンでやってきました。そして、早いものでもう四回目の開店です。

一年に二度、開店と閉店の作業をするのは結構大変なことですが、冬の到来と共に休眠し、春の訪れと共に活動を始める動物のようで、季節に添った休みと活動の変化は自然と体に馴染んで、意外と心地よいものです。

毎年、直前になってやっとエンジンがかかるのですが、今年は雪どけが早く、庭のチューリップや雑草の芽が、日々、目に見えて大きくなり、その勢いに背中を押されながら準備をしたので、どうやら四月十二日の開店にこぎつけそうです。

開店初年から「こまくさ」のスタッフは、商売に関しては素人、という人がほとんどで主に主婦の方々です。

そんな私たちスタッフとの信頼づくりに始まって、現実に毎日起こるさまざまな問題を、ひとつひとつ解決するにあたり、山岳博物館職員のみなさんが助けてくださいました。

そんなスタートではありましたが、回を重ねるごとにスタッフも仕事に慣れて、忙しいときでも手早く、楽しく仕事をこなしてくれるので本当に助かっています。

観光シーズンには、一度に注文が殺到し、頭がパニックに陥ってしまうようなときもあって、お客様に充分な対応ができなかったり、大失敗をしてしまったりと、落ち込むこともたびたびです。そんなとき、お客様の「コーヒー美味しかったよ。」の一言の嬉しいこと！落ち込んでいたことも全部忘れて、「また頑張ろう」という気持ちになります。

毎年二度、三度と、遠く広島県から来てくださる方、必ず顔を見せてくださる老ご夫婦、博物館が好きで、おじいちゃんと一緒に何回も遊びに来てくれる男の子、「去年の夏に来て、今年は友達を連れて来ました。」と、わざわざ立ち寄ってくださる方。などなど…

春になって、お店に立って、そんな方々にまた会えたときは、「あー、今年も無事に開店できてよかった」と、心からそう思います。

店名の「こまくさ」は、高山に咲くかわいい花ですが、成長が遅いため、大きな株になるには永い年月が必要だそうです。森林限界を越えた高山で、あんな小さな花が厳しい自然と共に生きて、成長しているということに、とても元気づけられます。「こまくさ」というお店に関わらなければ、広がらなかった世界があり、出会えなかった人たちがいます。いろいろな経験を糧に、喫茶「こまくさ」も、私たちも、山に咲くコマクサのように、少しずつ成長していければと思っています。

「こまくさ」の一番の自慢は、何と言ってもすばらしい北アルプスの展望です。四季折々、毎日違った姿を見せてくれます。スタッフ一同、一人でも多くのお客様に、この景色を美味しいコーヒーを飲みながら見て頂きたいと願っています。オリジナルグッズ斉藤清さんの図柄のTシャツなども取り揃えていますので、是非、一度ご来店ください。お待ちしています。

（喫茶・売店部　山形文子）

【喫茶・売店】オリジナルTシャツ、絵はがき、特産品の他、今年は山の本、ビデオも充実。

【パンセット　５００円】
手作りパンと飲みもののセット。パンは、天然酵母、国産小麦１００％のこだわりパン。

【ケーキセット　５００円】
手作りケーキと飲みもののセット。ケーキは、山ぶどう・かりん・くるみアーモンドの３種類。

博物館だより

人事異動

三月三十一日付で堀田洋館長が退職し、四月一日付で体育課より奥原徳則課長補佐兼社会体育係長兼勤労青少年ホーム所長が館長に就任いたしました。また、臨時職員の降籏絹代さんが退職、尾曽吏子さんが着任しました。

コマクサ園・付属園花暦

北ア山麓は今が芽吹き・開花の真っ盛り。野外で感じてみてはいかがでしょう。五月の開花予想は次の通りです。

〈コマクサ園〉・クロユリ（中～下旬）・ミネウスユキソウ（下旬～）・コマクサ（下旬～）

〈付属園〉・エンレイソウ・ナルコユリ・ツバメオモト・ホウチャクソウ・チゴユリ・ユキザサ・リュウキンカ・ニリンソウ・サンカヨウ・トガクシソウ・キバナイカリソウ・イカリソウ・シラネアオイ・サクラソウ

山と博物館第42巻第4号
一九九七年四月二十五日発行
発行　〒398 長野県大町市大字大町八〇五六－一
大町山岳博物館
TEL〇二六－二二－〇二一一
印刷　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇－七－一三九三